

そば屋の若き三代目店主は、 ITとアイデアで地域コミュニティ作りに励む

語り手:清水康智さん(西荻在住・そば処「田中屋」店主)
インタビューー:坂本晋吾さん(井草中学校1年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■お店の主人になるまで

康智さんのおじいさんが上野にあったそば屋さんで働いていて、“のれん分け”で昭和13年、現在の場所にお店を持ったのが田中屋さんの始まり。お店ができた当時は、ここ(西荻北4丁目界限)から西荻窪の駅が見えたという。また、道には馬車が走っていたそうです。

清水さんは長男ではなく次男だったけれど、子どもの頃から、お店の手伝いをよくしていた。手伝いをするとお小遣いがもらえるのも魅力だったそうです。そして、小学校の卒業のときの作文に「将来はそば屋になる」と書くほど、将来のことを考えていた。そして、高校時代には、跡を継ぐとはっきり決めていた。だから、大学に入って、就職活動の季節になっても活動などはしなかった。「大学時代はよく遊んだ」とのことでした。

また、子どもの時からそばだけでなく料理が好きで、大学生になるとファミリーレストランでアルバイトをした。がんばって仕事を覚えたので、大学2年生の時には、そのお店を任せてもらうほどだった。そこで働いてよかったのは、人のつかいかたの勉強をしたことだそうです。

大学を卒業した後、世田谷の割烹料理中心のそば屋さんで修行をした。やがで、お父さんが早く跡を継いでほしいということになった。だから、たった1年間だけの修行だったけれど、その1年でどこまでやれるか勝

負だと思ってがんばった。他の従業員より早くお店に入るなど“やる気”を見せ、先輩から仕事を教えてもらえるように気配りをして勉強した。従業員のまかない(夕食)当番をやらせてもらい、季節の素材を安く仕入れるなど、よい勉強になったといえます。そのお店での修行時代の先輩が、いまの奥さんである。修行先で腕を磨きながら、お嫁さんまで見つけたことになる。というわけでキ



ャリアは奥さんの方が上である。

▲上の人や周りの人に認めてもらうには、『やる気』を見せることも大切だよ。認められれば、新しい事にチャレンジさせて貰える。それから認めてくれた人達の期待を裏切らないこと。そのために常に努力することを忘れちゃダメだよ。

■お店のこと・そばの話

現在、お店は、お父さん、お母さん、清水さんご夫婦、そして従業員の人、5人できりもりしている。駅からは少し距離もあり、住宅街という立地から、お店に来るお客さんより出前が多い(約7割)。一般家庭だけでなく、近くの学校からの注文も多い。

夏はそば、冬はうどんがよく出るそうです。ところで、そばとうどんとは、使う水が違うことを始めて聞きました。うどんをつくる時には12%くらいの濃度の食塩水(けっこう辛い)を使う。ただの水だと、うどんの“もちもち感”が出ないからである。また、そばは“三たて”といって、「ひきたて」「打ちたて」「ゆでたて」、そば粉をひいたとき、そば

にした(打った)とき、ゆでてすぐ食べるのがおいしいといわれるそうです。

朝は午前6時30分から仕込みが始まる。わかしたお湯にけずった鰹節を入れて煮込み、だし汁を作ったり、その合間にデザートを作ったりする。そして11時の開店をむかえる。夜は午後8時にお店をしめ、その後も帳簿をつけたりするので、仕事が終わるのは午後9時過ぎになる。大変なお仕事だと思いました。

■地域活動にも積極的に取り組む

女子大通り商和会のキャッチフレーズは「ギャラリーのある商店街」で、吉祥女子高校、西荻まちメディア(NPO法人)等と連携し、地域活性化の方策を話し合い、商店街周辺のまちづくりに寄与している。骨董店・古書店・ギャラリーなどが多い町です。

清水さんのお父さんが女子大通り商和会の会長さんをされている関係で、大学時代からパソコンを使っていた清水さんに手助けをするように声がかかりました。専修大学の卒業論文では、田中屋に関係した「出前利用者の心理分析」をテーマに勉強したので、生活の支えである商店街の活動に興味をもったそうです。

いつの間にか、商店街のホームページ作りから始まって、イベントの企画など、商店街の活動が増えてきてしまいました。たとえば、夏下旬の盆踊り大会、バス旅行の外、「ハロー西荻」ホームページに掲載されているイベントの「ウォーキングラリー」、「落語の会」、「町会の回覧板」などの活動も清水さんたちの若いちからを集めてできたものです。また、その時だけ人が集まるような“打ち上げ花火”のような企画ではなく、地味でも毎日続けられるようなものが大切だと考えているということで一步一步考えながら進んでいく人のように感じました。



【坂本晋吾さんの感想】

商店街の掲示板に「子どもの絵展」、「昔の商店街、町の風景の写真展」を掲示して、「画廊のある商店街」という企画を考えたり、掲示期間中には、お花のプランタを置いて街を少しでも綺麗にする。また、反対のこともしてみる。子どもたちが街路にチョークで落書きをすることです。吉祥女子高校の学生さんの力、アイデアを借りて、お店のキャッチフレーズを考えたり、酒屋さんののれんや床屋さんの看板、お風呂屋さんのポスターなどを作ってもら。若い人たちと地域の人たちを巻き込み、外に向けてネットワークを広げてゆくというのが清水さんの考え方です。ニコニコしながら商店街のことを話していたのが印象的で、にぎやかな商店街にする努力も「ニコニコ精神」でやっていると었습니다。

田んぼや川が遊び場だった～下高井戸、今は昔の物語

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。

語り手:出川 木曾子さん(高井戸在住・方南・和泉地域集会施設運営協議会 会長)
インタビュー:佐竹 基治さん(向陽中学校2年生・男子)



■昔の下高井戸には田園地帯が広がっていた

僕は8月16日に永福和泉地域区民集会施設運営協議会会長の出川木曾子さんに、昔の東電グラウンドー帯と下高井戸運動場周辺についての話を聞きました。

戦時中の東電グラウンドー帯には田んぼが広がっており、今僕が通っている向陽中学あたり一面も田んぼでした。また、今僕達が使っている遊歩道も、農業用水路でした。

東電グラウンドのはずれには、神田川・かな橋あたりに3畳ほどの水車小屋があり、そこでは田んぼの用水を使って玄米を白米に精米していました。その水車小屋の下流では、田んぼを利用して氷を作っていたそうです(冷凍庫なんてまだありませんから)。また、うなぎの養殖もしていた時代があるそうです。出川さんの記憶では、田んぼで作った氷なので、藁などが入っていたそうです。

川や田んぼの遊びから帰ってくると、「手伝いなさい」と言われ、家で、一升瓶に入った玄米を竹の棒でしごいて精米したりもしていたそうです。そのお米も、食糧不足のときは1日1合食べられればいい方だったそうです。

昭和20年3月10日の東京大空襲では日本水園(日本水産の建物 注1)が軍事施設と間違えられて、たくさんの焼夷弾が落とされましたが、ほとんどの焼夷弾は木に引

かかってしまい、その焼夷弾から、たくさんの火花がまるで花火の様に散っていたそうです。また、当時の田んぼ(今の東電グラウンド)にも落ちて下高井戸駅の方から逃げてきた人が大火傷をし、リヤカーに積んできた家財も焼いてしまったそうです。

疎開から帰ってきたばかりの出川さんは、灯火管制で真っ暗闇の中で光る焼夷弾に思わず「きれいだなあ」と、言ってしまって避難してきた人にとっても怒られたそうです。しかし、その焼夷弾の破片を使って遊んだりもしたそうです。(どのように遊んでいたのでしょうか?少し気になります。)

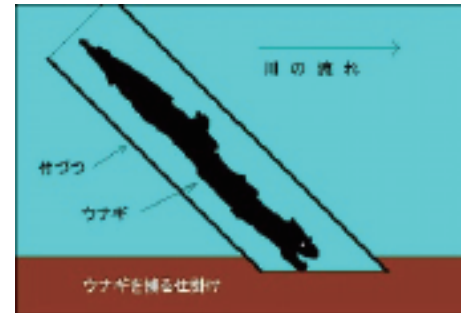
気候も今とは違って11月にはもうオーバーを着ないと寒くて外に出る事ができなかったそうです。あぜ道には霜枯れた草、霜柱、薄氷の張ったくぼみを見ながら歩く、冬の寒さが厳しかったので、田んぼにできた氷の上を下駄スケートで遊ぶこともあったそうです。

■時代とともに風景は変わり、川も消えてしまった・・

遊びも今とかなり違います。僕は普段友達と野球をやったり、パソコンをいじったりしていますが、出川さんが中学生だった頃は、神田川で泳いだり(今、神田川に降りたりすると危ないです)、鬼ごっこをしたりしていたそうです。でも、玉川上水(現在の上水公園)にはおっかない監視員がいて、泳いだりするのが見つかるこっぴどく叱られたそうです。今とは違って女子も男子もパンツ一枚で平気だったそうです。

そして川にも色々な生物がいて、竹に糸をつけた簡単な釣竿でフナを釣ったり、ドジョウにタニシ・なまずを捕まえたり、ザリガニをバケツいっぱいにつけてきて、食べたりもしたそうです。出川さん曰く「エビみたいな味がして美味しいのよ」とのことです。また鰻を竹で作った罟(図)で捕まえて丸焼きに

して食べたそうです。他に蛇を食べた人もいたそうですが、出川さんは食べたことはないそうです。この頃はまだ田んぼ用水、神田川とも、6月頃は蛭が飛んでいて夕方になると蛭とりを楽しんでいました。



▲昔は「ウナギ」が捕れたし、ホテルもたくさんいたのです。

出川さんは八人家族で食べ物が不足していたので、そういうものを食べて栄養をつけていたので良かったのですが、都心の子供達は栄養が足りなくて青白い顔をしていたそうです。

配給制の野菜も足りず、田んぼの近くのセリ、ナズナなどが生えていたのを食べたそうです。今ではセリなんてあまり見かけなくなり、僕もどんな物なのかあまりよく見たことがありません。

着ていたものは親の服をばらして作ったものや、木綿が無かったので人絹(じんけん: 人造絹糸の略。天然の絹糸を真似て作った化学繊維)や木の繊維を使って作った服で、肌を刺して痛かったそうです。

戦後もここは畑や田んぼばかりで空気がきれいだったそうです。しかし銀座に行くとその頃道路がまだ今のように舗装されていなかったで、砂ぼこりがひどくて、口の中がじゃりじゃりしていたそうです。1964年の東京オリンピックの頃から、田んぼを埋めて住宅、アパートなどいろいろな建物が建ち始め、日本の発展期にさしかかった時代になって、空気もだんだんよごれてきた。元は田んぼだった土地なので、今の向陽中を建てる時も倒れないか心配だったそうです。



そのため向陽中の基礎はかなり深くまで掘ってあるということです。



僕がこの話を聞いて思ったことは、「昔はきれいだった所なのに、いろいろと変わってしまって、棲んでいる動物も変わってきた」ということです。僕もドジョウを捕ったり鰻を捕って丸焼きにしたりして食べてみたいなあと思いましたが、神田川は既にコンクリートで固められてしまったし、今神田川にいるのは鯉とナマズだけです(井の頭公園まで行かないとザリガニもいません)。なんかとても惜しいです。

《編集部 注記》

(注1)日水園について編集部が調べた結果は下記の通りです。なお、調査には日本水産株式会社様のご協力を頂きました。

1942年、日水園という日本水産の厚生施設(野球場・テニス・バスケット)錬成道場(剣道・柔道)が開園された。1945年、捕鯨部・船舶部事務所設置、戦争中には、一部農園として利用された。1957年から10年間、研究所施設併設。日水園他用地8600坪を杉並区に売却し、この用地が、現在の下高井戸区民集会施設・下高井戸運動場・向陽中学になっています。

【佐竹基治さんの感想】

気になったことの質問と調べたことを感想にしてみたのですが、終戦当時の井の頭線・永福町駅の写真を出川さんと一緒に見ました。永福町駅に停車している1705型車両の行き先版に「渋谷⇄永福町」という風を書いてありました。「車庫が無いのにどうして永福町までなのだろう」と思いました。

後で読んだ資料によると今の京王バスの「永福町車庫」はその昔、車両工場だったのですが、昭和20年5月24日25日の空襲で焼けてしまったそうです。空襲で線路が

だめになっていたということも考えられますが、永福町駅の写真では終着用ホームが写っていました。当時は永福町の駅が今の富士見ヶ丘駅の役割を果たしていたのですね！

ちなみにその空襲で焼け残った車両はなんと2両だけで(当時井の頭線は一両編成だった)、神泉～渋谷間のトンネル(今もありますよね)のなかで奇跡的に残ったのです。その後、小田急線「世田谷代田」から井の頭線の線路に繋いで小田急線の車両10両が入って難を逃れました。

さらに小田急とともに東京急行(東急)と合併し、その後独立して京王線(当時は帝都線)と合併し今の京王があるということです。

もう一つは通っている向陽中学のことです。向陽中が日本水産の厚生施設敷地跡であったことははじめて知りました。中学の敷地内にクラブハウスを平成14年建設しましたが、建設地は旧石器時代から縄文時代の埋蔵物がありました。隣の下高井戸運動場も縄文時代の土器等が出土しています。このあたりは古代人が、川で魚などの恵みを得ていたところだと思うと胸がわくわくしてきます。

向陽中では、クラブハウス建設の際出てきた粘土を信楽陶土と混ぜて陶器をつくりました、これがきっかけとなって陶器部ができて今も部活は続いています。



【出川 木曾さんの感想】

佐竹君とのインタビューのきっかけは、平成7年に下高井戸地域集会所で行った「地

域フェア写真展」の写真集でした。このイベントでは地元の方々が戦前戦後の写真を数多く提供してくださった、提供された写真を地域マップに落として編集しましたので大変面白い試みだったのです。これらの写真は大切に保管されていたので、身近に再度見ることができました。そこでこの写真集の中から30枚程度を佐竹君に見ていただきながら、私の思い出を中心にインタビューをしていただいたというわけです。

昭和39年(1964年)の東京オリンピックの写真もありました。優勝したアベベ、円谷選手が懸命に走っている姿が映っています。甲州街道に住む者には忘れられないイベントでしたが、ちょうどその頃から、下高井戸方面は、のどかな田んぼが住宅地に、車社会に急速に変貌して、胸に吸い込む空気がおいしくなくなったのを覚えています。

空想好きの少女がプロのマンガ家になるまで、の物語

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。

語り手:麻乃真純さん(方南在住・マンガ家)

インタビュー:竜田凜さん(ペンネーム)(杉並第五小学校6年・女子)、横野咲由美さん(ペンネーム)(杉並第五小学校6年・女子)



■麻乃真純さんがマンガ家になるまで

1) 麻乃真純さんのプロフィール

麻乃さんは、千葉県のご出身。血液型はB型で、大好きなマンガ作品は昭和45年代の大和和紀先生、里中満智子先生作品です。

小学校の頃から時間があれば自分流のマンガを描いていた。小学1年生のとき、小学館から出ていた『小学1年生』という雑誌にマンガが載っていたのを見て、お話を作るのも絵を描くことも好きだったから、自分でもマンガを描きたいと思いました。

プロのマンガ家を意識し始めたのは高校生になってマンガ研究会に入ったところで、先輩からマンガの描き方を教わり、高校1年で30ページの作品を完成させました。その頃『別冊少女フレンド』という雑誌で作品を募集していたので、さっそく応募してみたら、1回目で「努力賞」をもらいました。賞という褒美をいただいた人は応募者の10%未満という激戦でした。次は佳作、その次は入賞を目指して、次々にチャレンジした。高校3年生の時、7本目の作品で作家デビューをした。16歳でプロになる人もいたが、デビューした年齢は早い方です。この作品をマンガ雑誌に投稿したのがきっかけで、自然にマンガ家になりました。

2) 麻乃真純さんとのインタビュー記録

私たちはマンガ家さんにインタビューをしたいと思いました。どうしてマンガ家さんに

インタビューをしたかったか、というと、私たちはマンガ家さんの職業に興味があったからです。マンガ家さんはどんなことをするのだろう。マンガ家さんはどうやってマンガを描くのだろう。そのような質問に答えてくれたのが、麻乃真純先生です。

麻乃先生が今までに描いたマンガは、

- ・「パートナー進め! ソラ」…1~7巻
- ・「あしたはハッピードッグ」…1~2巻
- ・「ほっとペットクリニック」…1~3巻
- ・「虹色のブーケ」
- ・「金の鍵」
- ・「夢の迷子」
- ・「金色の雪」
- ・「フィンガーアベニューにて」

など、数々の作品があります。



▲小学校の時からマンガを描いてましたね。結構、友達には評判良かったですよ。

■マンガはどのようにして作られるのか~麻乃先生に聞いたこと

Q:好きな動物は? A:やはり、犬ですね。

Q:犬は飼っているのですか?

A:飼っています『パートナー』のソラ(介助犬)を描いたことで犬を飼い始めました。

Q:小学生の時はどんなことをしていましたか?

A:小学5年生の時、友達と遊んで家に帰ってきたらマンガを描いたりお話を作ったりしました。描き終えた後、友だちに見せたり

しました。とても評判が良かったです。

Q:中学生の時はどんなことをしていましたか?

A:マンガ家さんの絵をまねて描いていました。当時から空想するのが好きでした。

Q:高校生の時はどんなことをしていましたか?

A:マンガ研究会というところで、本格的に描いていました。マンガをどんどん描いてコンクールに応募し、7つ目の作品を描いたときにプロとしてデビューしました。

Q:麻乃さんが使っているペンの種類は?

A:Gペンと丸ペンの2種類ですね。Gペンは太い線が描けてかけて、丸ペンは細い線も太い線も描けます。

●麻乃先生から… Gペンで太い線を描き、細かい部分は丸ペンを使う。基本的にはこの2本のペンで描く。また、影の部分などには、「スクリーントーン※」という素材を使う。また、黒インクではなく墨汁を使う。墨汁の方が柔らかい線が描けるから。

※スクリーントーン:透明なシートの上にドット、アミ、罫線、点描、柄、グラデーションなどが印刷されており、漫画原稿に貼り付けて用いる。モノクロ原稿において、微妙な陰影や擬似的な色彩を効果的に表現することが可能になる。

Q:1場面(合わせて1ページ)を描く時間は?

A:だいたい1ページに4時間程度の時間をかけます、1か月に1本のペースで描きます。

●麻乃先生から… 1ページ描くのには4時間くらいかかる。建物を描くのには1日かかり、ということもある。1か月に1本描くとして、2週間でストーリー、セリフやコマ割を考え、残り2週間でマンガにする、というのが仕事の進め方です。

Q:マンガを描くコツは?

A:マンガの絵を描くコツは大きさや方向などのバランスですね。マンガのストーリーを作るコツはまた別で違います。

↘

Q:交通費などのお金は自分のお金で払うのですか？

A:交通費は経費です。経費とは、先に税務署にお金を払っておいて、年明けにややこしい書類を出して、そのお金が戻ってくるという感じですね。

Q:麻乃先生が描いた『パートナー』はどのようなことがあって、なぜ描いたのですか？

A:当時、あまり仕事がなく、編集者の人から、ちょっと感動する動物系のものを描いたら？と言われたので描きました。

Q:『パートナー』に出てくる介助犬のことは、描く前から知っていましたか？

A:『パートナー』を描く前はぜんぜん知りませんでした。ぜんぜんわからないので日本パートナードッグ協会という所に取材に行きました。

●麻乃先生から『パートナー』を描くために、犬の写真集を見たり、犬の育て方といった本を読んだりして研究したり、また、描いていて分からないことがあると、すぐにパートナードッグ協会に電話して聞くことで確認をしました。あるいは、介助犬のイベントや募金活動にも参加して取材し、介助犬がどんな活動をしているのかを知るようにしました。

Q:マンガを描いていてよかったなあと思ったことはありますか？

A:ありますよ。あかの他人がよんでくれ感動したよって言ってくれたときです。旅行で訪れたペンションに私の本が置いてあったので、「これを描いたのは私です」と言って、親しく会話できた、なんてこともあります。

Q:マンガを描く順序は？

A:まずプロット(お話の筋を文章にしたもの)を書いた後、編集者と打ち合わせをしてページ数を決め、おおざっぱにコマ割りやそのページに出てくる人物とそのセリフを決めます(ここまでの仕事を「ネーム」という)。その後、下絵を描きます。下書きのような感じですね。

Q:登場人物の洋服は自分で考えるのです

か？

A:自分で考える時もありますが、ファッション雑誌を見たりもします。

Q:『パートナー』に出てきたような介助犬は必要だと思いますか？

A:必要だと思います。ただ、犬が楽しめる範囲で人間を助けることがいいと思います。

Q:尊敬しているマンガ家さんはいますか？

A:いまは、いません。昔はいたような気がします。

Q:マンガを描いた後の息抜きなどはどんなことをするのですか？

A:チョコを食べたり、買い物に行ったり、犬と散歩したりしています。

Q:マンガはたいていどこで描くのですか？

A:ほとんど家で描きますね。結構孤独な仕事ですよ。

【竜田 凜さんの感想】

麻乃先生から『パートナー進め！ ソラ』の1～7巻をプレゼントしていただきました！私は、麻乃さんにインタビューできて本当によかったと思います。麻乃さんのいろいろなことが聞けたからです。

最初はどんな人かと緊張していましたが、お会いしたら、すごく話しやすくてどんなことでも聞けたからです。一番びっくりしたのは小学生の時からマンガを描いていたことです。麻乃さんには本当に感謝しています。

【横野 咲由美さんの感想】

私は、これでも一応、マンガ家を目指したいと思っているので、麻乃先生にインタビューできて、本当によかったです。マンガ家の仕事のことも少しだけ分かったし。取材などの交通費が経費なのは、なるほどな、と思いました(自分で払うのだったら、大変だもんね)。麻乃先生、本当にありがとうございました!!

元動物園の園長さんに聞いた 野生動物たちの不思議で心温まるお話し

語り手:浅倉繁春さん(天沼在住)

インタビュアー:竜田 凜さん(ペンネーム)(杉並第五小学校6年・女子)、横野 咲由美さん(ペンネーム)(杉並第五小学校6年・女子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■浅倉繁春さんのプロフィール

・東京大学農学部農獣医学科を卒業して東京都恩賜上野動物園に入り、その後多摩動物公園に移り、園長さんをつとめられた。その間40年、あらゆる野性動物と接してこられた。

・浅倉家は400年余続いた家で家の維持管理もあり、どうしても東京を離れるわけにゆかない、そこで、東京に住み続けられる職業を選んだ。動物が好きなので東京大学の農学部農獣医学科に入った。

・興味のある動物は猿。10数年間、サル類の繁殖生理を研究したことがある。年中繁殖可能なサルもいるのに、ある時期しか発情しないサルもいることも研究で分かった。

・辛かったのは上野動物園時代、パンダの2回の死、元来高い山の涼しいところに住んでいたパンダには東京の暮らしは難しかったかもしれない。

・大先輩の古賀忠道博士の推薦で国際動物園長連盟会員となり動物の国際交流活動に寄与した。

■肉食動物と草食動物の違い

私たちは、獣医さんで多摩動物公園・上野動物園の園長さんであった浅倉繁春先生にインタビューしてきました。なぜ先生にインタビューしたのかというと、動物園の園長さんなんてめったに会えないし、いろいろ、動物の事についてのお話が聞きたかったからです。

はじめに、浅倉さんは、肉食動物と草食動物のちがいを話してくれました。動物には主に草などの植物を食べる草食動物と動物の肉を食べる肉食動物の2種類があります。しかし、人間も含めて植物も食べるし肉も食べる雑食性動物もいます。ブタやクマなども雑食である。自然のバランス関係で、草食動物の方が肉食動物よりも数が多い。

動物の赤ちゃんはお母さんのお腹の中にいるときは、羊水という水に浮かんでいる。だから生まれたばかりの赤ちゃんはぬれていて、人間と違って毛がはえているから、すぐに乾かしてやらないと死んでしまう。そこで、動物のお母さんは赤ちゃんが生まれたら、すぐにきれいになめて乾かしてあげるんだ。草食動物の赤ちゃんはすぐに歩きはじめることができる。いつ肉食動物におそわれるか分からないから、生まれた瞬間から逃げられるようになっているんだ。

浅倉さんが話してくれた事は動物のお母さんはどのようにして子どもを育てるのかです。



▲肉食動物と草食動物は生まれた時から違いがあるんだよ。

●草食動物

(1)子供は1～2頭、妊娠期間が長く、お腹の中で成熟して生まれる。目は見える、耳、鼻も発達している。肉食動物が現れたらすぐ逃げることができるように生まれてすぐに立ち、歩いたり、走ったりできるし、母親の

お乳を飲む。草食動物は危険を避けるため、お母さんのお腹の中に長くいて、かなり成長してから生まれるわけだ。お母さんの体内にいる期間は多くは8～9ヶ月だが、ゾウは22ヶ月、キリンは480日もいる。

(2)親は、草や樹木などの枝や花を食べる。植物は逃げないから比較的簡単に食べ物は手に入る。

(3)ウシやキリンなどの胃は4つに分かれる。胃の中で微生物が消化を助ける。腸は長く消化に時間がかかる。

●肉食動物

(1)子供は1～4頭、妊娠期間が短く(猫科は3か月)、生まれて1か月位は、目はよく見えない。音も十分に聞こえないのでお母さんは横になった姿で子どもにお乳をあげる。子どもはお乳のにおいで乳首の場所がわかる。ほぼ巣で約1か月位過ごす。おしっこやウンコも自分ではできないからお母さんがなめてやって刺激を与えて出るようにしてやる。そして出たウンコやおしっこもなめてやる。体を清潔にしてやる。

(2)親は狩りをし、肉を食べる。えさを捕らえるのは簡単ではない。

(3)2つの目が顔の前につき、距離を正確に測れるので獲物を一瞬で捕らえる。一方草食動物の目は顔の左右についているので、視野が広い。

(4)犬歯が大きく、えものを殺したり、肉をひきちぎったりできる。

(5)腸は短く、消化が早い。



■肉食動物と浅倉さんとの一問一答

Q1: 浅倉さんが獣医さんをはじめたのは、なぜですか。

A1: 東京大学に通っていて、動物の生態について研究していたとき、獣医という資格がとれたからです。

Q2: 動物は、かぜをひきますか。

A2: ひきますよ。

Q3: 動物の病気で浅倉さんが一番こわいと思う病気はなんですか。

A3: ジステンパーという伝染病ですね。伝染力が強いですね。ネコジステンパーは、血便をして、赤ちゃんは3～4日で死亡する。人間のハシカに近い病気です。

Q4: 動物を動物園に入れる手順は。

A4: 仕入れる方法は2通りあり、1つ目は、日本と海外の動物園から、お互いにほしい動物どうしを交換します。

2つ目は、動物商から動物を買います。ただし、滅びそうな動物はワシントン条約という法律で守られて動物を買うことが難しくなっています。国際交流ということで外国の動物園どうしで交換することは盛んです。

Q5: 動物をほかの動物園に移す時にはどうするの。

A5: 血統書といっしょに、動物園に送ります。

Q6: えさやりは、1日どれくらいですか。

A6: たいてい、1日に1回くらいです。でも、オランウータンやチンパンジーなどは、朝晩と1日2回です。

Q7: オリのそうじは、1日どれくらいしますか。

A7: 1日1回です。

Q8: 好きな動物はなんですか。

A8: サルです。研究していたものですから。

Q9: では、サルについて、少し教えてください。

A9: チンパンジーとボノボについて話しましょう。チンパンジーは、肉好きで、集団で狩りをしています。獲ったえものは、ゆずりあいます。手話を教えると、理解ができて話し合いができるようになります。(コミュニケーション)ボノボは、植物が好きで、手話

を1000くらい覚えます。話も分かるようです。

(注)手話について: 指や手の動きによって話し(信号)をすることで、アメリカの聾啞者の用いているものとおなじものです。

【竜田 凜さんの感想】

私は、あまり肉食動物やのことや草食動物のことを知らなかったので、教えてもらって、うれしかったです。ほかにも、ボノボやチンパンジーのお話も楽しかったです。

【横野 咲由美さんの感想】

私は、肉食や草食の動物に、はじめから興味があったので、話が聞けて、本当によかったです。ボノボやチンパンジーのお話には、とてもびっくりしました。浅倉さん、本当にありがとうございました。

歴史はミステリー、謎を解く名探偵の名は文化財修復士

語り手:石原道知さん(武蔵野文化財修復研究所・代表)

インタビュー:斑鳩 弥生さん(ペンネーム)大妻中学校3年生・女子(成田東在住)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■土器修復はジグソーパズル

考古学好きな弟と一緒に杉並区役所から歩いて5分ほどの場所にある「武蔵野文化財修復研究所」で埋蔵文化財の保存、復元などを行っている、石原道知さんにお話を聞いたり、土器を見せていただきました。

みなさんは縄文土器にも種類があるのを知っていますか？ 縄文時代と一口で言っても土器の雰囲気は時期で大きく違います。縄文時代始めのころは中ごろのものと比べ素朴ですっきりしていて、弥生式土器みたいな感じでした。中ごろの土器は一般的に知られているのは火焰型土器ですが、本当に数千年前の人がつくったのかと疑うほど感性豊かな太い文様と細かい模様の線で何らかの感情を表現しているものです。

終わりのころは弥生土器に近くなり縄目があまりついていませんでした。見せていただいた縄文土器は群馬県で発見された中期ごろのものですが、割れて失われた部分が多い状態で発見されるのが通常なのに、この土器はほとんど完全に部品が残る土器でした。このような状態で発見されるのは珍しいそうです。ただこの土器の底部は発見されていないので、そのことが分かるように色を変えて復元をしてありました。また、土器の中央に縄文人がわざとくり抜いた様な小さな穴があり、これは穴を埋めないでそのままにしてありました。底がない、中央の壁に穴があること、このことは縄

文人の生活と文化を推理する重要な手がかりなので、自分ひとりの頭で解釈して復元してしまうことを避けるためだそうです。発掘で毎回、毎回断片がそろって見つかるわけではなく、ほとんどが不完全な形で発見される時の方が多いそうです。このような場合、一つひとつの土器破片をくつつくかどうかを確認し接合していく。欠けているところ、欠落しているところが出てくるので樹脂で埋め合わせて全体像をイメージしながら形を整えて彩色する。美術学校の油絵科を卒業したのが役立っているそうです。また、ちょっとした色の変化や、割れ口などで「ここに当てはめれば正確に復元されるだろう」と予測し位置を決めるので、前後左右が逆になる可能性もあり神経を遣うそうです。

このほかに古墳時代の保存処理をした鉄剣を見せていただきました。切り口は朽ち果てて、握るところしか残っていなかったのですが、金色で、鳥の装飾が付いてとても綺麗に修復されていました。鳥が少し間抜けな顔をしていたのがおもしろかったです。



▲縄文後期の土器。緻密な細工が施されている中には、縄文人が埋める前にわざと一部だけ壊したと思われる土器があって、埋めた時の形にするか壊される前の形にするか頭を悩ますこともあります。

■“歴史探偵”との一問一答

石原さんにいくつか質問をさせていただきました。

Q1:縄文土器、弥生土器、鉄器の中でど

れが一番保存、復元が難しいですか？

A1:難しさはどれも一つ一つ違います。土器などは、破片がない部分の模様や形をどうするのか決めるのが大変で、考古学者、学芸員の意見を参考にして決めていきますが復元が捏造にならないよう気を使います。金属などはまれに金で装飾した部分がありこれは大変傷つきやすいので金を傷つけないように、顕微鏡をのぞきながら錆や泥、埃などを落とさなければならない、顕微鏡下の作業なので大変です。丹念にやればやるほどいいのですが、時間と予算の制限があり悩みながら丁寧な仕事を心掛けています。

Q2:この仕事をして一番うれしいことは何ですか？

A2:仕上がりが、うまくできて自分で納得できたときがうれしいですね。

Q3:発見されている鉄剣は刀みたいに片刃ですか、それとも両刃ですか？

A3:両方ありますが、当社に来るのは片刃のほうが多いですね、日本刀の元になるのでしょうか？

Q4:杉並区では埋蔵文化財は発掘されていないのですか？

A4:発掘されています。たとえば、高千穂大学のあたりで弥生時代の墳墓が出てきています。

杉並区には数多く、縄文時代やその他の時代の埋蔵文化財が発掘されていますので、中央図書館の地域資料室や郷土博物館に行つて資料を確認してください。

Q5:石原さんは美術大学の油絵科を卒業されたと聞きましたが、修復などの仕事に役立っていますか。

A5:美術大学では形を正確に写す、デッサンをたつぷり勉強します。形を大きくみる、細かな仕上げをする、時には大きな目、時には微細な見かたを訓練しました。このことは修復作業中の頭を柔軟に切り替えること



に役立っています。仕上げたものがきれいにできたときの楽しさは口には表せません。



▲弥生時代の土器に比べ、それより数千年さかのぼる縄文時代の土器の方が複雑で豊かになります。

【斑鳩 弥生さんの感想】

土器や鉄器などの修復、復元、保存をするのはどれもとても大変なことで「好きでなければとてもできないな」と思いました。杉並区でも土器や鉄器が発掘されていたのを知ったので「発掘」や「修復」をとっても身近に感じました。博物館などで展示されている土器や鉄器を見ている私たちの裏側では、石原さんたちのような方々がいろいろ苦勞されているのを知ったので、博物館に行く際はそのことも考えながら展示物を見ようと考えました。

【石原 道知さんの寄稿文】

その1

土器の修復というと博物館内で行われていると思われがちですが、一部は民間に委託して行われています。文化財専門の民間業者は、日本に5～6社あると思いますがその一つが武蔵野文化財修復研究所で、杉並区にあります。

東京国立博物館の土器など関東の博物館から依頼を受け埋蔵文化財の修復を行っています。

杉並区でこのような仕事をしている会社と人間がいることを出来るだけ多くの杉並区民に知ってほしいと切に願っております。

私の文化財修復に対する思いの一つに、

国民共有の財産である文化財は修復するにあたり出来るだけ情報を公開することが必要と考えております。

万人の目にさらされながら監視の下で修復されるのが理想です。ですから今回のインタビューは大変良い機会だと思いました。



▲修復は失われたものを補うことです。だからこそ、修復には勝手な思いこみや特別な意図が入らないように心がけています。

その2

縄文土器は、先史時代に作られ、使用されていた「うつわ」で、焚き火のような低温（磁器などは高温）で、焼かれた素焼きの焼き物です。文様に特徴があり、ほとんどの土器の外側には文様が入っています。文様の無い無地の部分、そこから何か悪いものが土器内に浸入してくることを恐れているかのように執拗に文様をくまなく入れています。

その文様の代表的なものが縄目で、よく観察すると、色々な撚り方で出来ていて、種類の多さに驚かされます。撚り紐の多様さから、当然繊維に精通していて、凝ったデザインの衣服がすでにあったことを想像させます。凝った縄目を作り出す技術に知的文化の高さがうかがえます。

この縄文を下地にレリーフのように立体的な文様を描きます。これら文様は各地方で特徴的な文様として発達していきますが無紋の物もまれにあります。しかし、その無紋の部分も何らかの塗料で文様を描き込んでいるのではないかと考えています。私が復元した浅鉢がその一例ですが、その土器は

川に近い低湿地の遺跡で出土しました。このような場所の遺跡では、普通は劣化してしまう木や漆などの植物が腐らずに残ります。例の土器は、表面に漆のようなもので、赤と黒に塗り分けて、渦巻きの文様を描いています。それが、水でバックされて残ったようです。縄文人はかなり文様にこだわりがあり、色と形にも芸術的センスを持っていたことが土器を修復していて思うことです。

すぎ丸は走る、南へ北へ。 人々のドラマを乗せて今日も行く

語り手:鈴木源一郎さん(南北バス「すぎ丸」ドライバー)
インタビュー:上野健太さん(浜田山小学校6年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■クルマの好きな鈴木少年が 運転手になるまで

ぼくは南北バス「すぎ丸」のドライバーさんをしている鈴木源一郎さんにインタビューしました。鈴木さんは、昭和11(1936)年に、茨城県の笠間市に生まれました。そのころは、1つの街に自動車は2台くらいしか走っていませんでした。また、そのころ、木炭車(注1)という木炭を原料にして走る車が普通で、坂道を上がる時はバックで上ったり、荷物が多いときは、坂の下で半分荷物を下ろしてから坂を上り、また降りてきて残りの荷物をのせて上っていったりしていたそうです。昭和31(1956)年、鈴木さんが20歳のときに自動車の運転めんきょをとったそうです。(当時は18歳でめんきょがとれた)。

元々クルマに興味があり、地元のお酒屋さんで3年運転していたそうです。そのあと、上京し石を運ぶ仕事についた。そして昭和40(1965)年ごろ、バスのドライバーさんになった。

渋谷のコミュニティバス(注2)のハチ公バス(渋谷区のコミュニティバス。区役所と区施設を移動する手段として作られた小型バス(19人乗り・座席数12))や、シャトルバス(注3)に運転手として乗り、平成12年(2000年11月)に「南北バス すぎ丸」の運行が始まると同時に、鈴木さんもすぎ丸のドライバーさん(「けやき路線・さくら路線」)になった。

浜田山から阿佐谷までの道のりはせまくふくざつで運転がむずかしい、鈴木さんはすぎ丸の走る道をじっさいに歩いてたしかめたそうです。「せまいところが多いし、生活している人が歩くのすごく注意しないと」と思ったそうです。鈴木さんは東京にきてから中野に住んでいますが、今では杉並のほうが身近に感じるそうです。



▲お客様に安心して乗って頂くためには安全第一です。運転だけではなく、足の悪い方や妊娠されている方がちゃんと席に着かれるまで発車を待ったり、ほかのお客様に席を譲っていただくようお願いしています。

■ダイヤの遅れより、お客さんの安全が大事

お客さんやすぎ丸の走るルートの近くに住んでいる人と顔なじみにもなったので出会うと手をふってくれたりすることもある。杉並区の人たちとの出会い・ふれあいの大きさを感じます。乗る人は私の先生と思って接するようにしている。そんな気持ちが通じるのか、感しやの気持ちといってプレゼントをくれる時があつてどうすればいいのかとまどう時があるそうです。運転する時に一番心がけているのは、「安全第一」はもちろんのことです。ダイヤが遅れても、お客さまの安全を大切にしたいとのことでした。

足の悪い方がいると、「ゆっくり乗ってください(降りてください)」と声をかける。乗ってきたお客さんが席につくまで待つてあげる。妊娠(にんしん)している女性に乗ってきたとき、席が空いていないときは、マイクで「どなたか席をゆずってあげてください」とお客

さまをお願いをする。そして、席をゆずってくださった方の顔をルームミラーで見て覚えておく。その人が降りるとき「ご協力ありがとうございました」とお礼をいう。そんなお客さまから、「おかげさまで元気な子どもが生まれました」とお礼を言われることもある。

ローテーション(きんむ体制)は、4日働いて(運転して)2日休む、また4日働いて、今度は1日休む、のくりかえしだそうです。すぎ丸のドライバーさんは鈴木さんをいれて23人、この23人ですぎ丸とハチ公バスなどの運行をしている。すぎ丸(けやき路線)は1日64便(片道)で、交代で運転をする。一人の運転手が8往復する。阿佐ヶ谷駅まえから浜田山駅前まで、停留所は34か所(往復)あり、約25分で走ります。朝は点呼(てんこ)から始まる。まずは自分のチェックで毎回運転めんきょを出し、アルコールチェック(お酒を飲んでいないか、飲んだお酒が体に残っていないか)を受ける。そのあと、すぎ丸の点検をし、OKが出たらバスのキーと金庫を受け取り出発です。自分のことだけでなく、仲間のことも考えている。自分の仕事が終わっても、こうはいの帰りが遅いと心配で待っていることもある。

お客さまからの感しやの手紙がとどくと、「善行(よいおこない)」として会社で紹介される(お客さまの言葉を紙に書いて張り出す)。鈴木さんはこれまでに50～60回も紹介された事があるそうです。

《編集部 注記》

(注1)「木炭車」: 戦中・戦後のガソリン不足の時代に利用された。木炭を暖めて気化し、そのガスを燃やしてエンジンを回転させるという原理。しかし、馬力は弱く、運転には技術を要した。

(注2)「コミュニティバス」とは : コミュニティ=生活する実社会・地域のためのバスサービス。コミュニティバスと呼ばれるバスシステムが誕生したのは1994。東京武蔵野市の「ムーバス」が最初といわれている。

(注3)シャトルバス: 首都圏全16か所から新宿・都庁大型バス専用駐車場まで運行し、各方向行きのスノーライナーに接続する連絡バス。

↘

【上野健太さんの感想】

鈴木さんは書るいばさを何十年もつかっている。なぜなら作った人のことを考えると「モノを大切にしないといけないと思う」そうです。あちこちつぎはぎだらけだが、使えるから、新しいものを買おうとは思わない。家で使っているものの裏側に買った年月日を書いてある。ちょっと調子が悪くなったとき、それを見て「もうそろそろ新しいものを買おうか」とか「まだ使える」とか決めるそうです。ぼくは鈴木さんを見なりたいと思います。鈴木さんのやり方なら、ぼくにとってもやさしいし、最後まで使おうと思います。ありがとうございました。

【鈴木源一郎さんの感想】

孫のような上野君のインタビューに接し、感謝の気持ちでいっぱいです。今後の原動力にします。お客様とのふれあいを大切にこれからもしっかりと自己管理をし、健康で一日も長く京王で仕事ができればと思います。健太君も勉強、運動にがんばってやさしさもてる人になってください。元気でね、ありがとう。

狂言にこめられた深い人間洞察と平和への願い

語り手:山本東次郎さん(和田在住・大蔵流狂言方、重要無形文化財総合指定・日本能楽会会員)
インタビュー:松本早紀子さん(成蹊中学校1年・女子)(高円寺北在住)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■狂言のこと

私は、狂言大蔵流の山本東次郎さんにお話を伺いました。

能・狂言は平安時代から鎌倉時代にかけて演じられた様々な芸能、猿楽が発展し、室町期になってより高度な理想を追い求める人たちの努力と工夫や都会的なセンスが加わって生まれました。時代が下がって「猿楽」も代わりに「申楽」という字をあててようになりましたが、「神楽」が神様に対する芸能であるのに対し「申楽」は人間に対する芸能ということになります。

「狂言」は、セリフによる対話劇で人間のこっけいさ、おろかしさを描いています。一方「能」は、歌舞劇で人生の悲しさ、苦しみ、美しさなどを描いています。この二つの演劇は対照的に見えますがもとは一つであったものが二つに分かれてできたもので、二つそろって初めて人の本質を全て表現することができるのです。だから、狂言と能は「水と油」のように異質なのではなく、「お湯と氷」のように、本質はおなじであるが状態の異なるものの関係なのだそうです。

それから、「面」(おもて)のお話をたくさん伺いました。「面」という字は、「狂言面」や「能面」という場合には「めん」と読みますが「面」だけの 경우에는「おもて」と読みます。狂言の面で代表的なものの一つが「黒式尉」という黒い翁面です。「翁」という曲で最初に面を入れて舞台に登場する箱のことを

「面箱」と呼びます。面箱は鈴と白翁面と黒い翁面が入っています。翁面は神様なので、面箱は小さなおみこしと考えられます。おみこしは、神様がある場所から他の場所へ移動する手段(乗り物の象徴)であるというわけです。白い翁は太陽神を表していて、黒い翁は五穀豊穰の神様です。稲は枯れるときに実るので人間も死ぬときに一番充実していたらいいという祈りも黒い翁に込められているそうです。「翁」では観客の前で演者が面をつけますが、それは、神体である面に人が体を提供するということです。



▲「能面」は、決して無表情ではありません。一つの面で、悲しむ顔も笑い顔も表現出来ます。

無表情な顔のことをよく「能面のようだ」といいますが、ほんとうは能面は様々な表情を見せます。けれどもその表情はおおきくは動きません。例えば、若い女性を表す「小面」(こおもて)という面は、少し下を向くと悲しい表情になる、すこし上を向くと少し笑ったように見えます。能や狂言では、面のほんの少しの動きで様々な心の動きを表現するのです。

面の裏側には、ふつう黒く漆(うるし)が塗ってあります。これは、面が汗で傷まないようにするためと、面の内側が目や口の穴から白く見えないようにする。ところが、山本家に残る小猿の面の裏側には漆ではなく墨が塗られています。小猿の役は5歳くらいの子供が演じるので、子どもが、漆にか

ぶれないようにという面の作者の優しさが感じられます。昔の人は、こんなところまで考えていてすごいと思いました。この話は、一番私の心に残りました。山本家に伝わる面には、700年前のものもあり、代々受け継がれてきた大切なもので、家宝(かほう)というより人類の宝といってもいいと思います。

■山本東次郎さんご自身のこと

山本さんの初舞台は、1942(昭和17)年、5歳のときに、「痠痢」(しびり)のシテ・太郎冠者(たろうかじや)だったそうです。この演目は、およそ10分程度のものです。

子どものころは、近所の子供と遊んだりもしたそうですが、学校に行く前と帰宅したらまた稽古をするという毎日だったと伺い、とてもいそがしい子どもだったようです。

お父さんはとても厳しい人で、夏休みは、午前中は勉強、毎日午後1時から午後5時まで稽古が続き、稽古の最中はずっと緊張したままなのでとてもつらかったそうです。そんなとき、稽古している舞台の庭先に蝶が飛んでいるのを見て、「ああ自由でいいなあ。蝶の行く先には自由な世界が広がっているんだろうな。一緒に飛んでゆきたいなあ」と思ったそうです。私はそのようなことを思ったことがないので、よほど大変だったのだと思いました。



▲親御さんが貴女のことを毎日大切にしてくるから、今の貴女があるのでしょう。面(おもて)も一緒です、毎日大切にすることを積み重ねていつのまにか700年たちました。(山本さんは、こともなげにおっしゃいますが……)



山登りやスピードスケートなどやりたいことはやってもいいと許してくれたそうですが、中途半端なことは許されなくて、やる以上は悔いのないように心を込めてやれといわれたそうです。一つのことを決めてきちんとやることはなかなかできないと思うので、すごいなあと思いました。狂言を演じていて一番楽しいことは一所懸命に見て目を輝かしている子どもを見ることだそうです。

700年ぐらい前に作られた面などをきれいな状態で保存しておくのは大変だと思いましたが、毎日大切にしているうちに700年にもなってしまうということです。不思議な気がします、確かにそうだと思います。

伝統芸能の狂言の世界では、勝手に自分のオリジナルなものを入れたりすることは許されません。手に持った扇の動かし方などが完璧にできるまで稽古をして基本が身につくまでします。自分なりの工夫をするのは、小さな子どもの頃から始めても、40歳～50歳くらいになってからなのだそうです。

能や狂言などで使う「能管」(のうかん)という横笛は、音を出すのが難しいように作られています。

わざわざそのように作ってあるのは、苦労して、努力してようやく音が出せるようになった時に初めて、良い音が出せるようになるからです。

伝統芸能では、笛に至るまで工夫をしてあるなんて知らなかったので驚きました。

狂言の良いところは、人間のおろかしさをほのぼのと表現していて、決して事件にしないところだそうです。事件が起きて、これを見ている人はおもしろがりますが、それでは他人事(ひとごと)になってしまいます。人の心をおもいやったり、自分の心の弱さや欠点を知れば、世の中はもっと楽しく平和でくらしやすくなると山本東次郎さんは思っているそうです。私もそのとおりだと思います。

【松本早紀子さんの感想】

私はこのインタビューを通じて、狂言についてはもちろん詳しくなりました。それから自分のふだんの行動を振り返ることや、人の気持ちを考えることの大切さを知りました。たくさんのことを学びとても楽しいインタビューでした。山本東次郎さんどうもありがとうございました。

【参考】

山本東次郎(やまもと・とうじろう)

1937(昭和12)年5月5日、三世山本東次郎の長男として東京に生まれる。流儀の正統派である山本会を主宰、山本東次郎家当主。

1992(平成4)年、芸術選奨文部大臣賞、1994(平成6)年、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。1998(平成10)年、紫綬褒章受賞。2001(平成13)年、エクソンモービル音楽賞受賞。重要無形文化財総合指定・日本能楽会会員。

山本東次郎家は杉並区和田に靖国神社に告ぐ都内で二番目に古い能舞台「杉並能楽堂」を擁し、江戸時代初期の狂言方で初めて狂言書を書き大蔵流中興の祖といわれている大蔵虎明の伝統を今に伝えていきます。

(「狂言装束と杉並能楽堂」より抜粋・杉並区郷土博物館編集発行)

日本音楽の伝統を支える、“日本人気質”のアメリカン

語り手:カーティス・パターソンさん(和田在住 邦楽演奏家)
インタビュー:藤井佑太朗さん(松浜中学校2年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■お箏（こと）のこと（注1）

私の祖父が高円寺で青果物商をしているのでよく遊びに行っていました、その関係で阿波踊りのサークルである「天狗連」に入り毎年高円寺で踊っていますので、三味線には親しみを持っていました。

パターソンさんは、箏と三味線の先生です。ご自宅兼稽古場に早く着いたので、稽古の様子を垣間見ました。「せーの」とパターソンさんが言うとお弟子さんが弾きはじめる、「せーの」という合いの手をいうなんて、この方は日本人の心をよくつかんでいると思いました。

はじめに、箏の説明とパターソンさんの師匠である沢井忠夫さんが作曲した「鳥のように」を演奏してくれました。箏のことはよく分からないので、パターソンさんがいったとおりに書き出して自分の感じ方を少しつけます。

・各弦に柱(じ、箏柱「ことじ」ともいう)を立てて、その位置の調節によって音の高低を定め、右手の親指・人差し指・中指にはめた爪(箏爪)で弾きます。爪は生田流の角爪や山田流の丸爪など流派によって異なっていて山田流では箏に対して正面に、生田流では爪の角で弾くので、やや斜めに正座するとのこと。弦は13本あり、奏者の向こう側から一二三四五六七八九十斗(と)為(い)巾(きん)と呼びます。カーティスさんは故沢井忠夫先生の門下生で生田流で

す。

・箏はさまざまな音が出せるところが魅力で、#(シャープ)、ダブル#、ミュートなど、右手で弦をひいて音を出した後でさまざまに変化をつけることができる。箏の柱の位置を自由に変えることが出来るので、どの音階でも作れます。一番低い音から一番高い音までの音域はだいたい3オクターブです。

・箏には十三弦の他にも、宮城道雄(注2)が開発した十七弦、最近では二十弦といったものも作られているのです。もともと伴奏用だった箏ですが、十七弦や二十弦といった低音が出せる箏の出現で、独奏もできるし、多数の箏での合奏において、音に深みを持たせることもできるようになったことで、クラシック音楽の演奏のように合奏することが面白いとパターソンさんは考えているようです。

・箏は桐製で、高価なものは木をくり抜いて作るので、百万円以上もする。練習用の安いものは10万円以下だが、安いものは、広いホールでの演奏では後ろの方の席まで、鋭い音が届かない。やはり時間と手間をかけてつくったものにはかなわないとのことでした。



▲「箏を間近に聞く機会は滅多にないでしょうから、インタビューの前に一曲弾きますので聞いてください」と箏を弾き始めたパターソンさん。その音色は優しく人を包んでくれる。

【編集部 注記】

注1. 箏(こと):コトという楽器には「箏」の

字を使うのが正しい。現在では琴の字を使う人もあるが、もともと箏と琴とは違う楽器である。胴の上に柱(じ)を立てて演奏するのを箏、立てないのを琴という。古くは弦を張った楽器はすべてコトといった。

注2. 宮城道雄(1894～1956):日本を代表する箏演奏家・作曲家。西洋音楽の要素を導入し、箏と尺八の二重奏曲『春の海』(1929)など現代邦楽への橋渡しとなる新しい箏曲を作った。

■パターソンさんと箏のこと

どうして、箏、三味線に惹かれるようになったのか理由をきいてみました。

アメリカ、イリノイ州シカゴの農家の子どもとして育った、アイオワ州コーネル大学に在学中にジャズの好きな教授が箏を持っていた、聞いたことのない音色に惹かれて彼から箏を教わった。ピアノ演奏はやっていたが、同じ弦楽器なのに、箏は直接手で弦にさわって演奏するのがユニークで興味をもちました。経営学を勉強していたのですが、箏を通じて日本にも興味を抱くようになり、大学2年の時に箏アンサンブル演奏旅行で初めて来日したのが、本格的な箏を習う動機でした。4年生の時に早稲田大学に留学して1年間滞在したので日本語は少し覚えることができました。一度帰国して社会人として働いていたのですが、日本のことが分かり始めて興味も深まっていたことに気づき、やはり日本で箏の勉強をしないといけないと思い立ち、文科省派遣の高校の英語教諭になって栃木県の高校で英語を教えながら、生田流の先生について本格的に箏を習い始めた。

その後、京都に友人がいたので京都に住むことになった。そこで沢井忠夫(注3)先生の弟子だった方に会い、オーケストラのように合奏したりする沢井派の演奏に惹かれ、箏のイメージが大きく変わったそうで



す。沢井先生に直接習いたいと思い、上京。現在の住まいの近くに友人がいて、和田の一軒家の一階を借りて住むことにした。それ以来、もう14年も住んでいる。沢井先生が主催する沢井箏曲院で沢井忠夫先生と奥さんの沢井一恵さんから学び、現在パターソンさんは、同院の教師であり、お弟子さんが十数人通ってくる。



▲初めて箏の音に触れたのは、アメリカの大学でアメリカ人の先生が弾く箏だったのです。

【編集部 注記】

注3. 沢井忠夫(1937～1997): 尺八家であった父の影響を受け、小学5年生の頃より箏曲を学ぶ。11才でNHKより初放送する。1959年 NHKの「今年のホープ」に選ばれる。以後NHKを中心に現代音楽を演奏し始める。海外でのコンサート活動も多く、芸術祭優秀賞を数度にわたって受賞。1979年には沢井箏曲院を創立し、後進の指導にも当たった。

■パターソンさんと東京（日本）のこと

生まれ育ったシカゴでは一番古いものといってもせいぜい150年程度の昔のもので、200年前は大草原だったのだから仕方がないでしょうといっていました。アメリカでは隣家は遠く離れているが、日本の（現在住んでいる）家は、隣近所の人の動きが見える。それはイヤなことではなく、かえっておもしろいと思うとのことでした。

日本の生活で一番驚いたことを聞いてみました。今は食べ物に関して困ったことはあまりない。周りの人が食べているものは何でも食べてやろうと思っている。寿司は、生ものだし触感がフワフワしていて最初は抵抗があったが、いまでは好物のひとつ。納豆もブルーチーズのようなもの、同じ発酵食品だから平気で食べる。ぬか漬け、漬け物

も食べる。といった後に、ある時、朝早く釣りに誘われた、釣り場に行く船の上でカレーパンと牛乳の朝食を出されたときは驚いた。甘いドーナッツだと思っていたのに、パンの中がカレーだったのでこれは驚いた。

栃木にいたときにイナゴの佃煮を食べたときは、最初は少し抵抗があった。でも、醤油と酒とミリンで作る日本的な食べ物だと思う。3年ほど前に帰国した際、筑前煮を大皿一杯に作って家族に披露したら、あつという間になくなった。焼き鳥と同様に、筑前煮もアメリカ人が好む代表的な食べ物と思うとのことです。同じく、日本にきて驚いたのは、電車の時刻の正確さ。それと、新宿のアルタとか紀伊国屋の前など、友人や知人と外で待ち合わせをすること。日本は家がせまいからか、お互いを家に招待しないので、親しい友人同士でも、お互いの家を知らないことも多いのがおもしろい。

パターソンさんの夢は、お父さんと2人の兄弟がシカゴに住んでいるので、できれば年の半分をアメリカで暮らしたいと思う。しかし、お弟子さんの稽古もあるので、1週間ほどしか留守にできない。ただ、ニューヨークなどでは箏のコンサートも開かれることがあるが、シカゴなどの中西部ではまだ知られていないので、年に2～3回のライブ活動や箏のワークショップをしたいと思っている。箏の音はアメリカ人はあまり聞かない音、珍しいものだと思う。しかも、音の出し方や弾き方で、人間らしい暖かさを感じさせることができるので、ぜひ広めたいと思う。

【藤井佑太郎さんの感想】

私は、まずカーティス・パターソンさんの箏の演奏を聴き「こんなにすばらしい演奏ができてどれだけ練習をしたんだろう」と思いました。パターソンさんの箏の流派は生田流だそうです。

箏の流派は、二種類あるそうで箏爪が丸いのが山田流、四角いのが生田流だそうです。パターソンさんの、師匠は、箏の世界

で有名で、ネスカフェの第一回のCMにも出ていた故沢井忠夫さんです。

宮城道雄さんは、学校の音楽室の「日本人の音楽で有名な人の欄」にポスターがはってありましたが、箏の有名な人だと改めて知ることができました。

私は、インタビューの時にパターソンさんは、あまり日本語が話せないかと思ったが・・・日本語がとても上手でした。

パターソンさんはインタビュー中、「初めて日本に来た時は？」という質問などに、とても分かりやすく説明をしていただいたのでよかったです。箏は、日本の文化なのにその文化を外国の人が支えているという現実を感じるインタビューになりました。

【カーティス・パターソンさんの感想】

藤井さんが若くて、率直に話を聴いてくれたことがとてもよかったです。一般の人の、お箏に対する知識は非常に薄くなっていて、今回の取材で少しでもお箏に興味を持つような人が増えると嬉しいです。

無料体験レッスンは定期的にやっていますので、よかったらご連絡ください。

海外生活で深まった 美しい生活環境への関心と杉並・花咲かせ隊の活動

語り手:稲葉真行さん(高井戸在住 投資・運用会社勤務)

インタビュー:村上将さん(荻窪中学校3年・男子)、大谷夏生さん(井荻中学校3年・男子)

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■はじめに

2005年10月9日に投資・運用会社に勤務している稲葉真行さんにインタビューをしました。稲葉さんは中学時代サッカーなどのスポーツをし、つい最近では会社のホッケーチームでゴールキーパーをしていたとのことでした。

■高校在学当時の将来の夢

西高校在学中は、数学が得意だったのだ、将来は数学を応用して何かしたいと思っていた。そんな折、年に1回、卒業生が母校に来て講演する機会があり、お茶の水女子大学の藤原正彦先生の話聞いた。「自分の研究が世の中の人役に立っているのか、わからなくなるときがある」という話を聞き、自分の力で生きていける能力を身に付けたいと思うようになる。

大学は経済学部に行くべきか迷ったが、会社に入ってからでも経済は勉強できると思い、法学部にいき、世の中の基礎を作っている法律を勉強した。卒業する際の職選びでは、同級生の多くは官僚や弁護士になることを志望していたが、自分は国際的なビジネスをしたいと考え、大手証券会社に入社した。

■証券会社に勤める

新人の期間は外交訪問の営業をした。大阪、札幌にいた4年間で、個人の方々など株式・債券などを売るための基礎知識、経

験を苦労して身に付けた。1年目は、1日100枚名刺をもらってくることを目標としていた。これは当時の証券会社では、営業マンを鍛える目標として一般的であった。このときの苦労によって、今では売ろうと思うものは、自動車でも、ミシンでも何でも売れる自信がついた。

■海外生活の体験

入社5年目に、同社スイス現地法人のチューリヒ駐在になった。東京と連絡を取りながら、スイスの銀行に日本の経済状況やこれからの経済動向を説明し、株式や債券などを買ってもらった仕事をした。チューリヒからスイスの国境へはとても近く、車で1時間～3時間でフランス、ドイツ、オーストリアに着く。週末には、色々な国へ旅行した。

また、ニューヨークにも4年滞在した。9・11の同時多発テロの時には、ワールドトレードセンター(WTC)の現場からわずか数百メートルしか離れていない事務所に勤務していたが、事務所の窓からWTCより煙が上がっているのを見て、テロであることを直感し、すぐに避難した。



▲海外勤務で異文化コミュニティに触れたことは、良い経験になっていますね

海外駐在勤務の仕事は厳しいが生活環境は良い。稲葉さんは、スイスでの休日はスキーやウインドサーフィンをして過ごし、帰国後会社のアイスホッケー部で活動した。奥さんは、ニューヨークでは様々な異文

化コミュニティを探訪し、またフランス料理学校に通った。このように趣味や視野が広がり、趣味が縁で多くの人と知り合うことができることが海外駐在の良い点であるとのこと。

■証券会社から投資・運用会社へ

投資・運用会社は投資運用を行う会社である。投資理論や金融工学をニューヨーク・ボストンで勉強をした。現在は、大きな金額の資金運営を任されていて、アメリカやヨーロッパなどの外国の会社100社ぐらいに投資をしている。毎年、外国から数百社程度の首脳陣やアナリスト(事象を分析し判断する専門家)が訪ねてきて自社や担当企業についての説明をしてくれる。

ところでアメリカには小さな投資会社がたくさんある。競争は激しいが、小さい会社の中には、成績の良い会社も多い。お客さんにとってプラスになれば会社の設立は簡単にしておいて起業を促進しようというのが、アメリカ流の原則自由のルールである。国際時代なので、お金は簡単に国境を越えていく。お金を運用するところ、お金を預けるところ、お金を使うところがそれぞれ違うのが金融の世界である。

■質疑応答

Q:「杉並花咲かせ隊」(注)のボランティアを行っているそうですが、どうしてですか?

A:今、住んでいるマンションの管理組合の理事長をしています。同じマンションに花好きの方がいて、誘われたのがきっかけです。近くにある高井戸・藤が丘公園で花を植えたり、その管理をしたりしています。きれいな花で飾られている街は犯罪や事故が起きにくいのではないかと思います。街の清潔度と治安の良さには関係関係があるという研究者もいるそうです。事実、ス

↓
イスのチューリヒも窓辺には花が飾ってある家が多く美しい安全な街でした。

Q:外国で暮らしていて驚いたことは何ですか？

A:スイスでは、日常生活では、あまり英語が通じず、最低でもドイツ語が必要でした。大変でしたが、対訳(英語・ドイツ語)辞書を持ってがんばりました。映画を観に行ったときは、字幕が3カ国になっているので、びっくりしました。画面の3分の1が字幕という状態で、下のほうは見えなかったくらいです。

また、アメリカはとても大きな国なので、西海岸と東海岸とで3時間の時差があります。例えば、ニューヨークで会議を朝8時からすると、西海岸の人は自分の生活時間の感覚からすると早朝の5時から参加していることになります。このようなことも平気で受け止めて仕事をしている人がいて、すごいと思いました。

会議には、アメリカ人をはじめ、日本人、中国系、インド系の人など様々な人々が出席しています。だから、相手を説得できるように説明をし、理解を得ることがとても大切です。やさしく丁寧に話すことが肝心です。相手を説得する根気に感嘆しました。アメリカ人は、日本人やヨーロッパ人よりも話が面白く、自分の伝えたいことをうまく伝えることが上手でした。早くから、様々な文化的バックグラウンドが入り混じった中でビジネスをしてきた経験から学んだことだと思います。

また、自分の子供を会社に呼んで、親が仕事をしているところを見せることがあります。このようにして、アメリカの会社は、親子の対話が進むように工夫をして、子供が親の仕事の理解をするようにしているのだと思いました。

■稲葉さんからのインタビューへのアドバイス

受験期に入っていると思いますが、自分のクラスや、自分の周りにやる気のある生徒がいる学校が、一番良い学校です。また、自分で考えて行動ができ、よい結果を出

せる教育環境があることが良い学校であると思います。

■稲葉さんのお薦めの本

杉並区の図書館にもある「マネーボール」(マイケル・ルイス著、中山宥訳、ランダムハウス講談社刊)という本をぜひ読んでみてください。この本はメジャー・リーグのオークランド・アスレチックスが、大金をかけることなく、どうして強いチームを作ったのかということについての秘密を解き明かした本です。慣習や思い込みにとらわれず、客観的に事実を見つめて物事を判断していく姿勢の重要さは、スポーツビジネスのみにとどまりません。とても参考になるのでぜひ読んでみてください。

【村上将さんの感想】

自分の肩にとっても大きな金額が乗っかっているのに、それに動じずに仕事をやっていて、すごいと思いました。説明も簡単に、細かく説明してもらったので、分かりやすくてよかったです。将来のことまで考えて高校を選ぶことが大切だと思いました。稲葉さんを見習って、納得のいく生活を将来送れるように、これからもがんばっていきたいです。

【大谷夏生さんの感想】

高校生の時代から将来のことをしっかり考えていてすごいと思いました。お薦めの本も紹介してもらったので読んでみようと思いました。外国での経験も詳しく話してくださって、外国で生活することに興味を持ちました。将来、どのような仕事をしたいかしっかり考えてそれに向かって努力したい、稲葉さんのように自分が納得するような仕事をするようになりたいと考えます。

【稲葉真行さんの感想】

最近、色々なメディアで、学生とビジネスマンとの接点が少なく、学生の方々が職業意識を持ちにくい社会になっていると指摘

されています。今回、二人の中学生の方々と話をする機会を持って、私もそうした印象を持ちました。一方、私自身の方も、自分の原点を考え直すきっかけとなりました。ありがとうございました。

注:「花咲かせ隊」は、地域の皆さんが花の植え付けをしながら公園などに花壇を作る活動です。2004年12月現在、公園などで84団体約590人の皆さんが活動しています(「広報すぎなみ」2005年1月1日号より)。

師匠の意思を継いだそば職人の夢は、 ニューヨークにそば屋ライブハウスを！

語り手：清宮 道心さん（成田在住 「石挽き手打ちそば・道心」店主）
インタビュー：瀧本 将司さん（井草中学校1年・男子）

若いあなたに
今語りたい
「私の想い」
がある。



■清宮道心さんがそば屋さんになったのは

清宮道心さんは栃木宇都宮市生まれ。拓殖大学、政経学部政治学科。クラブでロックバンド活動をしていて、その時の夢は大学を出てミュージシャンになることでした。

作る仕事が好きだから、自分の好みで作れるからと四谷のそば屋でアルバイトをしました。

そば屋につながったきっかけは、そばの師匠である甲斐吉次さんの生き様と人間性にほれて、甲斐さんについて行こうと思ったからです。仕事は厳しいけれど、飲みに行くときはとてもやさしく大変誠実な人で、おいしいそばを食べてほしいと、一日をそば打ちのために過ごすほどの人でした。甲斐さんがそば屋だったからそば屋になったのであって、もし甲斐さんが違う職業だったらその職業をやっていたそうです。

甲斐さんの経営する四谷のそば屋で20歳から36歳までの16年間修行しました。52歳で師匠が脳梗塞で亡くなり、それからは師匠の代わりに奥さんと一緒に店を守ってきました。

師匠が亡くなったときに「そば屋の芸術家になれ」という遺言を残してくれました。清宮さんはこの意思を受け継ぐつもりです。36歳のときにこの阿佐谷にたどり着きました。

■道心さんのそばは

初めてそばを打ったのは20歳。初めて打ったそばは、師匠も食べて「まだまだ」と言われました。まだ店には出せるものではなく、店にそばを出せるようになるまで1年かかりました。

最初に作ったそばは、「せいろそば」、「せいろ」で始まり「せいろ」で終わるのがそば屋です。「せいろ」とは冷たいそばで一番ストレートのそば、「せいろ」の良し悪しでそば屋の良し悪しが決まっています。

「だし」のこだわりはかつおぶしです。1本1300円から1500円のかつおぶしを5本、かつおぶし削り器を使い手で削っています。削りたてのかつおぶしをたくさん使って、水から細火で一時間煮立て「だし」を作る。「あく」をこまめに取るのが肝心。次に、砂糖と醤油を煮出す。その煮汁を一週間寝かして、「かえし」を作ります。「かえし」と「だし」を混ぜて「そばつゆ」を作る。24時間常温で寝かし、その後、湯せんで半日暖める、自然に冷やす、このようにして「そばつゆ」ができます。



▲これが「そば包丁」、結構重いよ。

小麦粉が5割以上入っていたらそばじゃなくてうどんになる、最低5割以上入ってないとそばとは言えない。町のそば屋は、小麦粉が7割、そば粉3割が普通です。なぜかというとな小麦粉20kgで6000円、そば粉は20kgで2万円ぐらいするからです。道心の「せいろ」は9割がそば粉、小麦粉1割で調

合しています。新そばみたいにとりたてのそばの実を使うときはぴったり9割でやるとピシッとなり凄いい香りがします。そばの刺身を食べているような「せいろ」になります。そば粉は茨木県下館産と北海道の深川産の「かおり」を使用しています。

そば作りはつらいけど楽しいです。打ったそばは6時間で食べないと終わってしまいます。打ってから6時間過ぎたものは捨てるしかありません。捨てるときが一番つらい時です。

楽しいのは、「そばと話す」とき。そばと会話できないとダメですね。そばには感謝しています。そばが一生懸命頑張れる人間に変えてくれた。俺にもできるんだ。「そばは食べてもらってこそそばになる」「昨日より今日。今日より明日の方がうまくできるように」と自分に言い聞かせています。

そば粉を木鉢に、水回しをして手を入れる。粉をかき混ぜながらそばの香りを楽しむ。子どもの頃の粘土遊び、砂遊びを思い出す瞬間です。水分を含んだそばは、練れば練るほど、お互いに結びつこうとする。自分に、ゆっくり、素早く、丁寧に、強く、心を込めて、練りあげるようにと、そばが自分に命令します。この時間が一番幸せを感じるそうです。

■道心さんの一日

店に入るのは午前9時。蕎麦粉をひき、50人分のそばを打つ。薬味作り、ご飯ものの仕込みと準備、食材の買出し、そして忘れてはならないのが店の掃除です。11時に開店。午後3時にいったん閉店。この間に銭湯に行きます。なぜなら、職人は、開店前にお風呂に入り夜の仕事の前に身を清める。繁盛するようにと願う意味でお風呂に入るのです。午後5時に営業を再開して、また夜のお客さんのためにそばを打ちます。午後9時閉店。後片付けを済ませると

↘

大体午後11時近くになる。重労働だが好きな道だから我慢できる。そばの風味・香りは微妙で慣れないと香りはかぎわけが難しい、道心さんはそばの香りはむせ返るほど感じるとのこと。店のお休みは金曜日。金曜日はつけ汁作りの日と決めています。

■将来の夢は

今でも続けているバンドではシンセサイザーを演奏しています。将来はニューヨークでそば屋のライブハウスを作るのが夢です。そば屋としてこれからも生きていきたいです。



▲お店は気に入ってるけど、ライブをやるには狭いかな？

【瀧本 将司さんの感想】

小学4年生のときに1度そばうちを体験しました。粉をこねて自分でそばを打ちました。そばの太さもまちまちでとっても大変だったのを思い出しました。今回そば屋をインタビューすることになっても、そば屋の仕事がどういうものかわかりませんでした。道心さんの話を聞いていて、そば屋の仕事にどんどん興味がわいてきました。これからはおいしいそばを作ってください。ニューヨークでのそば屋のライブハウス、夢をかなえてください。